一つ歳を重ねて元気に

今日 9 月 17 日で、また一つ歳を重ねた。正直なところ、ここまでよく生きながらえたと思う。母からよく聞かされたが、幼き頃は病弱であり、近所の医者から「この子は 10 歳まで生きられるか」と言われたそうだ。母には本当に世話になったが、たいした親孝行もできなかった。

そんな私が、10 歳頃から背丈も伸び、下手くそながら草野球などに熱中するようになった。体育の授業で、いつまでも逆上がりができないなど、苦手なことも多かった。小学校から中学校までの悩みは、体力面だけでなく、吃音（どもり）であったことだ。レポートにも書いたが、幼い頃に近所の友だちの母親に、明ちゃんと遊ぶと「どもりがうつる」と話していたのを近くで聞いて、押し入れで泣いたことを今でも覚えている。幼い頃や少年・青年時代の衝撃的な体験は、この歳になっても、心の底に深く影響していると痛感する。

学校の授業で先生にあてられると、最初の言葉が出ないのである。国語の教科書などを読む順番が迫ってくると、心臓がどきどきして、教室を飛び出したくなる。終わりのチャイムが鳴ると、ほっとしたものだ。でも、次の授業では最初の順番になるわけで、再び、ふさぎこんでしまう。朝日新聞朝刊「患者を生きる」で、吃音が連載されていた。思わず切り抜いて、じっくりと読んだ。吃音に悩む若者の苦悩が心に迫った。9 月 8 日には、「かつて吃音は家庭環境が原因とする声もあったが、近年は主に遺伝による体質や脳の機能異常が原因とする報告がでている」と伝えている。

高校時代の後半から、あまり吃音に悩まされることは少なくなった。自分で「調子」をつけ、吃音を意識せず、積極的に喋るようになったからだろうか。教室で落語めいたことを披露したこともある。もともと、人を笑わすのが好きであった。これは今でも、寒いダジャレにつながっている。大学時代には、信州松本の街なかで、デモ行進のシピュレヒコ―ル役もつとめた。そんな経験を経て、大学教師として 35 年間にわたり教壇に立ってきた。名古屋時代には、大学の研究室でテレビのインタビューを受け、時にはスタジオでも「辛口コメント」した。先日、久しぶりに大阪市役所で NHK からインタビューを受けた。大阪市廃止・特別区設置の是非を問う住民投票に関する住民監査請求についてである。

写真は先日、自宅窓から撮った夕方の西の空である。今の心境をあらわすような景色だ。歴史ある大阪市廃止が現実味をもちつつある。11 月 1 日、コロナ禍で強行されようとしている住民投票で「賛成」が「反対」を上回れば、大阪市は廃止され 4 特別区に解体される。後戻りできない。そんな酷いことを阻止するため、微力ながら力を注いでいる。

（2020 年 9 月 17 日）